



ミルク サキュバス

おしかけ淫魔は純情乙女!?

小説 神崎美宙
挿絵 Velia

立ち読み版

序章	
第一章	おしかけ淫魔は純情乙女!?
第二章	ラブラブ同棲生活
第三章	恋する二人
第四章	初体験
第五章	デートでイチヤイチャ
第六章	お嫁さんはサキユバス
終章	

登場人物紹介

Characters



泰人さんの精を
私に吸わせて
いただけませんか……？



ライラ=ヴァレファール

泰人に一目ぼれして、おしかけてきたサキユバス少女。「運命の人」と恋人同士になるのを夢見る乙女で、家事も拔群。精力回復の効果のあるミルクを出せる。

せらやすと 瀬良泰人

両親が海外出張のため、一人暮らしをするごく普通の男の子。
ライラ好みの精を持っている。

少年が自分の胸に釘付けになっていたことに気づいていたらしく、サキュバス少女はまるで見せつけるように自慢の巨乳を寄せ上げる。

ずっしりと重たげな特大プリンはお湯の中で弾み、肌がほんのり桜色に上気していて色がさらに増していた。ライラは淫らな笑みを浮かべ、そんなエロおっぱいを勃起ペニスへと押しつける。

むにゅん！ むにゅつ……むにゅううう……ッ!!

見るからに柔らかかそうだった豊満おっぱいに肉棒を挟まれた瞬間、股間に甘く蕩けるような痺れが走った。

「はうっ!? す、すごつ、何これっ……気持ちよすぎるっ!!」

手コキともフェラチオとも違う、また新たな肉悦に童貞少年の身体は歓喜する。

一瞬で全身の血液が沸騰したかのように体温が上昇し、興奮で心臓が高鳴り脈拍がどんどん速くなっていく。

マシユマロのように柔らかい乳房が肉棒を優しく包み込み、心地いい乳圧のおかげで股間が蕩けるような甘い感触が広がる。

「きゃん！ 泰人さんのペニス……私の胸の中でビクビクって震えてます……」

欲情した若い男根を乳肌で直接感じている美少女の方も、湯気でしっとり濡れた瑞々しい唇から熱っぽいため息を漏らした。その吐息が巨乳の谷間に埋もれている亀頭に吹き

かかり、またしても腰がピクンと震える。

「んっ……どうですか？ 私のおっぱい……気持ちいいですか……？」

髪をアップにしているせいで初めて見る白いうなじが妙に艶っぽく、大人びた色気を増しているライラが上目遣いに見つめてきた。

「は、はいっ……めちゃくちゃ気持ちいいですっ……」

人間に変身した彼女は上品でおっとりとしていて可愛いお嬢様風の美少女なのに、その表情は淫らに蕩け、すっかり発情した牝の貌かおをしている。

サキュパスなのだからこちらが本当の貌なのかもしれないが、彼女のまとうエッチな雰囲気は飲まれてしまった少年は壊れた人形のように何度もコクコクと首を縦に振って頷く。

「本当ですか？ うふふ、私もサキュパスですからパイズリくらい知ってますけど、実際にするのは泰人さんが初めてで……気に入ってもらえてよかったです……」

エサを目の前にした牝豹のように瞳を輝かせていたかと思うと、少年が喜んでいると知ったライラは嬉しそうに目を細めてハチミツのように甘い笑みで表情を蕩けさせる。

演技ではなく感情一つ一つが素直に顔に出ているのだろう。それにサキュパスなのにエッチなことをするのは泰人が全て初めてと言う。だから彼女が心から自分を欲してくれているのは痛いくらいに伝わってくるし、その可愛い姿が男心にキュンキュンくる。

「いっぱい気持ちよくしてあげますから……泰人さんの美味しい精液、たくさん私に飲ま

せてくださいね……」

切れ長の眉尻を下げにつこり微笑むと、両肘を張って乳房を支えながらゆっくりと上下に揺らし始めた。

ムニユッ！ ムニユ、ムチッ！ ムニユン、ムニユンッ！！

挟まれているだけでも気持ちよかったライラの巨乳がペニスを扱き、思わず射精しそうになるほどの快感が股間を包む。

まさに精を搾り取ろうとするかのようにモチモチとした乳肌が肉竿と擦れ、その度に腰が反応してビクビクと震えてしまう。

「はうっ！ ライラさんっ、ううっ……」

すぐ下半身に力を込めて暴発を阻止するが、温かくて弾力のある乳肉と敏感な肉勃起が擦れ合う度にじわじわっと甘い痺れが童貞ペニスを刺激する。

おかげで少しでも気を抜けばそのまま搾り取られてしまいそうで、泰人は不恰好に開いている両足を必死に踏ん張り射精欲に耐えていた。

「ああ、いいです……泰人さんのペニスが熱くて……精の匂いもどんどん強くなっています……ん、んっ、早く飲みたいです……」

ライラは興奮気味に声を弾ませながら重量感たっぷりの巨乳を揺らしまくる。そのグラビアアイドル顔負けのサイズを誇るバストが肉棒を扱く度に、ジャブジャブとバスタブの

お湯が波立ち、極上の快感を送り込んでくる。

しかも美少女は首を屈めて胸の谷間に埋もれているペニスに顔を近づけ、ペニスから漂う牡の香りを楽しむように鼻を鳴らしていた。

「そ、そんなところの匂いを嗅がないでください……」

「……ダメですか？ はんっ……こんなにいい匂いなのに……」

少年が恥ずかしそうに声を上げるとサキュバス少女は不思議そうに首を傾げ、宝石のように輝く大きな瞳をうっとりとした細めながら見つめてくる。

しばらくそのままパイズリを続けていたライラだが、視線はチラチラと乳房の間から顔を覗かせているエラを張った亀頭に向けられていた。しかし見ているだけでは我慢できなくなったらしく――。

「ああん、もう我慢できないですっ……んちゅ、ちゅるっ……ちゅぶぶっ！」

待ての状態からエサに飛びつく子犬のように美少女はペニスにしゃぶりついた。

唾液をたっぷりと含んだ舌先を鈴口に這わせ、プリプリとした瑞々しい唇で膨らんだ亀頭をパクリと啜え込む。心地いい乳房の感触に加えて、敏感な先端に熱い吐息と舌肉が絡みついてくる。

「うああっ……そ、そんなっ、フェラまで……はぐう！」

竿の部分をおおっぱいの温もりと敏感な先端を刺激する熱い口内粘膜の感触。異なる

二つの肉悦が混ざり合い、さらに強烈なものへと変化して全身を駆け巡る。

童貞少年は生まれて初めて味わうパイズリフェラの快感に翻弄され、四肢には力が入らなくなり強くなる射精衝動を抑えるのに必死だった。

「ソっ、ちゅぱっ……はあ、泰人さんのペニス美味しいですっ……それに精の匂いもすごくて……私も興奮しちゃいますう……」

左右の乳房を交互に上下させてペニスに擦りつけ、舌を伸ばして先端に滲む先汁を舐め取るライラ。匂いをかぐだけで発情してしまうと言うほど大好きな泰人の精の香りを間近で楽しみ、熱くたぎる肉棒を乳肌で直接感じているのだ。

もう堪らないとばかりに嬉しそうに表情を綻ばせて少年の逸物を味わい尽くそうと胸で、口で、舌で奉仕を続ける。その愛情たつぷりの激しい愛撫に童貞ペニスは翻弄され、射精欲がムクムクと大きくなっていく。

「……あ、あんっ！ 私も感じてしまっ……ミ、ミルクがっ……」

鼻にかかったような甘い吐息を漏らしていたサキュバス少女だが、パイズリをしながら自分も感じていたらしく、ぷつくりと膨らんだ乳輪の中心で硬く尖っている乳首からは白いミルクが滲んできた。

「はち切れんばかりの巨乳から溢れたミルクは乳肌を伝い、お湯の中へと消えていく。それでもライラのミルク風呂に浸かっているんだと思うと余計に興奮してしまう。」

(す、すごいっ……ライラさんのおっぱいからミルクがどんどん出てくるっ！)

乳房をペニスに擦りつける度に乳首からは白い乳液がびゆるびゆると噴き出し、少年の股間や逸物にも飛び散った。お湯とはまた違う温かい液体で濡れた乳房で扱かれ、逸物はますます快感に歓喜し、幸せな乳圧に包まれながら痙攣を起こしたように谷間でビクビクと震える。

それに肉体的な快感だけでなく、ライラの巨乳が射乳しながらパイズリをしている光景は迫力たっぷりです。視覚的な刺激も凄まじく少年の視線は釘付けにさせられていた。

「あ、はあんっ……す、すみません……胸が気持ちよすぎて、ミルクが止まらなくなっちゃったみたいです……」

極上のミルクおっぱいを揺らしながらライラが謝罪の言葉を口にする。もはや自分の意思では射乳を止められないらしい。

「謝らないでください……ライラさんのミルク気持ちいいですよ……それにエロくて最高ですっ……」

確かに男の中には女性のミルクが苦手という人もいるらしいが、泰人はそれほど気にならなかった。

どうせお湯で濡れているのだから身体にかかっても特に困るわけでもなくヌルヌルしていてミルクパイズリは気持ちいいし、昨日飲ませてもらって美味しかったというのもある。

それに彼女のミルクは、一生懸命ご奉仕をしてきているライラも感じている証拠だと思
うとむしろ愛しく感じてしまうくらいだ。

「本当、ですか……んっ、はぁ……嬉しいですっ……私、頑張りますから、もっともっと
感じてくださいねっ……」

「くうっ……で、でも……そんなに激しくされたら、出ちゃいますよっ……」

少年がミルクパイズリで興奮していることを知ると、サキュバス少女は嬉しそうに微笑
みながらさらに激しく自慢の巨乳でペニスを扱き続ける。

しつとりと濡れた乳肌に包まれるだけでも気持ちよかったのに、そこにミルクのなめら
かさが加わり、股間を襲う快感はさらに高まるばかりだった。おかげで湧き上がる射精衝
動も大きくなり、限界が近づいてくる。

「んっ、んっ……はい、我慢なんてせずに……は、早く出してください……」

あまりに呆気なく射精してしまっただけは男の矜持に関わるが、ライラとしては一人で留守
番している間からずっと待っていたため、早く精液を飲みたくて仕方がないらしい。

少しおっぱいを押しつける手を緩めると、サキュバス少女は舌を伸ばして急かすように
乳房の間からわずかに顔を覗かせた亀頭をつついてくる。その尖らせた舌尖は特に敏感な
鈴口を穿るように刺激し、男根は堪らずにドバドバと我慢汁を溢れさせた。

「ああっ！ ほ、本当に出ちゃいますよっ……」

アダルトビデオや漫画で見るだけで憧れていたパイズリを、それらに出てくる女の子よりずっと可愛くて魅力的な美少女が実際にやってくれている。しかもおっぱいからミルクを滴らせ、そのミルクを塗りつけるように扱っているのだ。

オカズを見ながら一人でオナニーしていた時には感じたことのない生の息遣いに温かい体温、髪の毛から漂う甘い香り、そして直接触れた気持ちよすぎるおっぱいの感触に少年の興奮は最高潮に高まっていた。

「……ンふう、い、いいですよっ！ 泰人さんの精液、私に飲ませてください！」

射精を催促するようにペニスを乳房でギュッと押しつけながらサキュバス少女も興奮気味に息を弾ませる。

発情し、頬を赤らめうっとりとした表情を浮かべる美少女のご奉仕に理性は完全に溶かされ、手足から力が抜けていく。両足が生まれたての小鹿のように震え、身体を支えるだけで精一杯だった。

「うぐっ、ライラさんっ！ 僕、もう、イクっ……」

限界を感じて視界が白く霞む。それと同時に自然と腰が浮き上がった。

「はあ、ああんっ……はい、くださいっ……泰人さんの精液を私にたくさん飲ませてくださいっ！」

巨乳の揺れに合わせてバスタブの中のお湯が大きく波立ち、ライラは舌を垂らして口を

開けておねだりするように上目遣いに見つめてくる。

「ああ！ で、出るっ……出ますっ!!」

そんな彼女の口元をめがけてペニスを突き出し、幸せな乳圧に包まれながら少年はついに絶頂に達した。

ビュビュッ！ ドビュ！ ビュルルッ、ドビュドビュウウウ——ッ!!

自分でも驚くほど熱くなった精液が尿道を押し広げるように駆け上がり、勢いよく吐き出される。

「んぐっ……むふ、んんっ……こんなにたくさん、んっ、ちゅ、ちゅぶぶっ……」

ライラは咄嗟に首を屈めてペニスにしゃぶりつくが、あまりに大量の精液を一気に口内に流し込まれたせいで目を大きく見開いていた。しかしすぐに嬉しそうに目を細め、乳房の中で何度も脈動する逸物を吸い上げる。そして待ちに待った少年の精をゴクゴクと喉を鳴らしながら嚥下していった。

「……はむ、んっ……ああ、泰人さんの精……とつても美味しいです……」

美少女は口の中に出される牡汁を一滴残さず飲み干し、尿道に残った残滓すらストロ―でジュースを飲むように吸い出しながら恍惚とした表情を浮かべている。

人間に変身していてもさすがサキュバスといふべきなのか、その貌はとてもエッチでつい見とれてしまう。しかもライラはただ精を吸うだけでなく、唾液やミルクまみれになっ



ているペニスにお掃除フェラをしてくれる。

「そ、そんなことまでしてもらったら悪いですよ……」

「うふふ、いいんですよ……美味しい精をご馳走してもらったのですから、これくらいさせてください……ちゅ、ちゅぷっ……」

まるで甘い飴を与えられた子供ののようにサキュバス少女は嬉しそうにペニスにしゃぶりつき、根元から先端までだけでなく玉袋まで舌で舐めて綺麗にしてくれた。

（ライラさん、すっごく美味しそうに僕のチ○コしゃぶってる……）

夢中になって逸物を頬張るライラは本当に幸せそうで、見ているこっちも嬉しくなってくる。そんな彼女が可愛くて無意識のうちに湯気でしっとり濡れて艶を増した金髪を優しく撫でていた。

「あ、すみません……つい……」

慌てて手を引つ込めるが、ライラはペニスから口を離して照れたように頬を赤くしながら首を横に振る。

「いえ、謝らないでください……泰人さんなら、もっと撫でてもらいたいです……」

「そ、そうですね……あの、気持ちよかったです……ありがとうございます……」

「私こそ美味しい精を飲ませていただいて、ありがとうございます……」

ご希望通り再びサキュバス少女の頭にそっと手を置きつつお礼を言うと、美少女は蕩け

るように甘い笑みを浮かべて見つめ返してくれた。

「あの、そんなに美味しかったなら……もつと飲んでもいいですよ……」

今さっき射精したばかりとは言っても、ペニスはいくらにしゃぶられていて、目の前では白くて大きなおっぱいが揺らめいている。再びムクムクと性欲が湧き上がり、ミルクパイプの快感を思い出して股間は疼き始めた。

「秦人さんの精は美味しくてもつと飲みたいですけど……今日はこれだけ吸わせてもらえれば十分ですから、また明日お願いしますね……ちゅっ♪」

期待に胸と股間を膨らませる少年を他所にサキュバス少女は綺麗に舐めた亀頭にキスをする。口を離してしまう。

「え、そんな……我慢しなくても……」

「一度にたくさん精を吸うと秦人さんの身体に障りますから……お気持ちだけ吸ってもらっておきますね、ありがとうございます……」

本音を言うとは下半身は満足していなかったが、身体のことを心配してくれるライラの言葉を見てもつと奉仕を要求するなんてできなかった。

それに彼女が自分のことをただのエサとして見ているのではなく、大切に思ってくれているんだということが分かり嬉しくなってくる。

「分かりました……じゃあ、また明日にでも……」

なめらかでモチモチとした乳肌の感触を楽しむように握力を込めると、金髪娘はおもしろいくらいに敏感に反応し、肩を震わせながら甘い声で喘ぐ。

胸への愛撫により膣肉も反応して激しく収縮し、ギョツギョツとペニスにキツく絡みついてきた。何とか力を入れてへっぴり腰になりながらも腕を伸ばし、彼女の巨乳を揉み続ける。

「いいじゃないですか、ライラさんもいっぱい感じてください……」

「もう感じてますよお……はうん、ンふっ……」

指先や手のひらに広がる幸せな感触を楽しみながら、エプロンを中央に寄せて乳房を露出させた。

ブラウスの胸元は大きく左右に開き、半分ほど下にずらされたブラのカップからこぼれ落ちるように突き出している二つの大きなおっぱいがふるんと弾み出してくる。

（うお、ライラさんの乳首もピンピンになってる……）

手の中で揺れる巨乳の先端はすでに硬く尖り、その周りの綺麗な薄ピンク色をした乳輪もぷっくりと膨らんでいた。指先で摘んでみるとコリツとしていて、蕩けるように柔らかい乳肉とは全然違う新鮮な感触が伝わってくる。

しかも生で触るとライラも感じやすいらしく、膣内ばビクビクと痙攣を起こしたように激しく震え、さらにキツくペニスを締めつけてきた。

「泰人さん……ん、本当におっぱいがっ……ああんっ！」

彼女の反応が嬉しくて夢中になって乳房を揉んでいると、ツンと硬くなった乳首に白い乳汁が滲み少年の手や下乳へと滴り落ちていく。

イヤイヤと言いながら少年の腕を掴むライラ。しかしその力は弱々しく、本気で嫌がっているわけではなさそうなのでお構いなしに揉み搾り続けた。

「やあん、搾っちゃダメですう……はあ、泰人さんが濡れてしまいますから……ふうん、んふううっ……」

ぴゅうっ！　ぴゅ、ぴゅーっ！　ぴゆる、ぴゅううううっ！！

ポタポタと溢れていたミルクは一度出始めると、すぐに放物線を描くように大量に乳房から飛び散る。

まさにミルクタンクと呼ぶに相応ふさわしい迫力たっぷりの射乳シーンだ。

「別にそんなことはいいですよ……ん、ライラさんのミルク甘いです……」

泰人は口を開いて舌を伸ばし、飛び散ってくるミルクを受け止める。

ほとんどは顔やベッドのシーツにかかってしまっているが、ちゃんと甘くて美味しい乳汁の味を舌先で感じた。

「ああっ、ミルクは飲んじゃダメですよ……んはあっ！　どんどん泰人さんの精が、濃くなってきて……ひいん、美味しすぎて、私っ……はうんっ！」

腰の動きはすっかり止まり、サキュバス少女は勃起ペニスで処女肉を貫かれたまま搾乳される快感に身悶えしている。

その姿が色っぽくてますます乳を揉む手に力が入ってしまう。しかも少年が興奮すればするほど膣に流れ込んでくる精は濃厚になり、ライラの子宮を直撃する。

「そんなにいいですか？　じゃあ、もっと気持ちよくしてあげますっ……」

童貞で性技に自信なんてまったくなく、本や動画で得た知識を総動員させただけの稚拙な愛撫ながら愛しい恋人はしつかり感じてくれていた。それが嬉しくて調子に乗った少年は胸を揉むだけでなく、腰を下から突き上げる。

「手コキともパイズリとも違う、柔らかくて熱い膣粘膜がペニスと激しく擦れ合う。そんな生まれ初めて味わう感覚に股間は歓喜し、全身が興奮に打ち震える。」

「んひいっ！　い、今のすごいです……ズンって、奥に響いてきて……感じすぎちゃいますう……」

跨られているのでそんなに大きな動きはできなかったが、騎乗位ということもあって膣口を押し広げる逸物がさらに深く膣奥へと突き刺さり美少女は甲高い悲鳴を上げた。

しかし浮き上がった彼女のヒップが重力に引かれて股間の上に落ちてくると、同時に幾重にも連なる肉ヒダで覆われた膣壁とペニスが淫摩擦を起こす。包み込まれただけで気持ちよかったのに、性器を擦り合わせるとその快感は何倍にも膨れ上がっていく。

(うわあっ……あ、危なかった……今、出そうになった……)

自分で腰を動かしておきながら、その快感に驚いて思わず射精しかかり情けない声が漏れそうになる。

おっぱいを揉むのとは違い、性器を擦り合わせればお互いに感じてしまうという当たり前のことに気づいて慌ててピストンを中断した。漫画やアダルトビデオで何度もセックスシーンは見て妄想していたが、実際に自分が体験するとなると完全に別の行為である。百聞は一見に如かずとはまさにこのことだ。

「はああんっ、き、気持ちよすぎます……腰が勝手に動いちゃいますっ……」

しかし今の動きが牝欲のスイッチを入れてしまったらしく、ライラは軽くウェーブのかかった金髪を振り乱しながら自ら腰を打ちつけてくる。

「う、ああっ……ライラさんっ……激しいっ……」

「んふう、泰人さあん……私っ、泰人さんがもつと欲しくて堪らないんですっ!」

肉感的なヒップが波打つ度にその反動でベッドのスプリングが軋み、少年の腰も勝手に上下に動いてしまう。

まったく隙間なく密着する膣粘膜と肉竿がまた激しく擦れ、下半身が痺れるような刺激が広がり射精欲が一気に湧き上がってきた。

「ああ、すごいですっ……セックスが、こんなに気持ちよかったなんてえ……」

ライラは少年の両手を手繰り寄せて少し前屈みになり、身体を支えながら腰を振りパツンパツンと肌がぶつかる音を響かせる。その小気味のいいリズムミカルな腰の律動が股間に快感を塗り重ね、奥から湧き上がってくる射精欲を刺激してやまない。

「もうダメですつ……頭が真っ白になっちゃいますつ！ あ、はぁん……つ！」

しかも彼女は普通にセックスで得る肉悦だけでなく、我慢汁を溢れさせている肉棒を膣内に咥え込み精を吸い取っているせいでかなり感じてしまっているようだ。

ライラはすっかり快感に酔い喘ぎまくっている。

(うおおお……ライラさん、めっちゃくちゃエロいつ……)

普段はおっとりとしているのにサキュバスの本能なのか、処女でもどンドン積極的に精を貪っていた。そんな美少女の積極的な腰使いに、今度は泰人が翻弄される。

股間に力を込めて耐えるが淫肉に埋まった肉棒からはドバドバと先汁が溢れ、愛液と混ぜり結合部で淫らかな水音を響かせていた。

「やだ、私ったら……こんなミルクがつ……んつ、ふぁぁあつ……」

甘ったるい声を上げながら自ら腰を振り、むき出しになった巨乳を揺らしてミルクを溢れさせ乱れるライラ。

唇からこぼれる悩ましげで熱っぽい吐息が発情した牝の匂いと甘酸っぱい髪の香りが鼻先をくすぐり、ますます興奮を煽る。

「す、すみません……ライラさん、僕もう……出そう、ですっ……」

生まれて初めて味わう膣粘膜の感触に加えて、美少女のこんな扇情的な姿を目の前で見せつけられてはそう長く耐えられるはずもなかった。

何とか抑えつけていた射精欲も、あっという間に自分の意思ではどうしようもないほどに膨れ上がっている。

「本当ですか？ いいですよ、このまま私の中に……たくさん注いでくださいっ！」

少年の限界が近いことを知るとライラはますます激しく腰を揺らし、蜜でびしょ濡れになっっている膣粘膜で肉勃起を扱き責め立てた。

その気持ちいい女陰に吸い込まれるように腰を使ってしまう。そうするともつと強く擦れて、ますます我慢できなくなると分かっただけでも腰の動きは止められなかった。

摩擦を繰り返せば繰り返すほどに股間の奥から熱い衝動が湧き上がってくる。

ズッチャー！ ズチュウ！ ズチュウウウツ！！

「わ、分かりましたっ……いっばいライラさんの中に出してあげますから……受け取ってくださいっ……くううううっ……」

もうこのまま快楽に身を委ねようと、揺れ弾む乳房に手を伸ばし思いっきり揉み搾る。ずっしりと重たいのにマシユマロのように柔らかい乳房の感触を楽しみながら、半ば自棄^けになって肉棒を膣奥に突き立てた。

「はあん、嬉しいです！ ああ、さつきから泰人さんの精が欲しくて子宮がきゅんきゅん
いってますっ……」

力任せで単純すぎる腰使いだつたが、ライラは嬉しそうに目を細めながら息を弾ませて
いる。自慢の巨乳からは止め処なくミルクが溢れ、膣口は溢れた愛液で大洪水状態。

しかも負けじと長い髪を揺らし、普段の上品でおっとりとした姿からは想像できないほ
ど淫らで情熱的にヒップを股間にぶつけてくる。

「んひいい、ああ……や、泰人さああんっ……素敵ですっ、どんどん泰人さんの精が流れ
込んできてっ……私もイキそうですっ！」

ただでさえ狭かつた膣内が収縮を繰り返し、まるで精を搾り取ろうとするかのようにさ
らにキツくペニスにしゃぶりつく。

ゆさゆさと暴れまわる乳房はミルクを撒き散らしながら揺れ踊り、それを手で捕まえて
おくだけで一苦労だつた。

(ぐうっ、そろそろ本当にヤバいっ……)

処女肉の中を出たり挿入つたりしながらペニスはギンギンに勃起し、先端からは我慢汁
を溢れさせている。いよいよ限界が近い。

ズリュツ！ ズチュツ！ ズツチュ！ ズツチャツ！

いつの間にかきこちなくバラバラだつた二人の腰の動きは同調し、粘膜同士が擦れ合う

快感は増していく一方だった。敏感なカリや裏筋だけでなく、肉棒全体に柔らかく熱い肉ヒダが絡みつき、若い逸物は悲鳴を上げる。

そして股間の奥で熱い欲望の塊が一気に暴発した。

「ライラさんっ、もうダメですっ！ で、出ますっ……出るうううっ！」

ついに限界に達した少年は、思いっきり腰を突き上げて勃起ペニスサキユバス少女の膣奥にねじ込んだ。

「ああああん！ ん、はああ、お、奥に当たってえ……膣が泰人さんでいっぱいになってますうううっ!!」

その激しいピストンを受けたライラは、ビクビクと身体を震わせながら髪を振り乱して仰け反る。

本能的に射精を悟ったのか、下りてきた子宮口が亀頭に吸いつき、蜜で濡れみっちり絡みつく膣肉が肉竿を強烈に締めつけた。

「ライラさんっ、ライラさんっ、あああああつあああつあ~~~~っ!!」

咄嗟に彼女の腰を掴んで固定すると同時に頭の中が真っ白になる。

そして次の瞬間――。

ドビュビュッ！ ビュルルルッ、ビュビュウウッ！ ドビュ、ビュビュ、ブビュウウウウウ~~~~ッ!!

「灼熱のマグマのように熱くたぎる欲望の塊が凄まじい勢いで尿道を押し広げながら駆け上がっていった。

「んひひひひひひひひ、あああああつ……しゅごいですつ……こんなにたくさん精が私の膣にいいつ……あひいつ、イクうううつううツ!!」

処女肉を貫いた童貞ペニスの先端から精液が弾け飛び、あつという間に膣内を満たすほど大量の射精を繰り返す。

ぴゅるる！　ぴゅ、ぴゅつ……ぷしやあああゝゝゝつ！

肉体的な悦びに加えて極上の精を子宮に直接流し込まれ、ライラもアクメに達したらしく甲高い悲鳴を上げている。

しかも乳房からはミルクが飛び散り、膣口からはお漏らしのように潮を噴いていた。

(はああああ……気持ちよすぎて止まらないっ……)

まさに魂まで吸い取られているかと思うほど激しい射精が続き、たつぷりとサキュバス少女の膣に精液をご馳走した。

ライラもそれをしつかりと受け止め、愉悦に蕩けた表情を浮かべている。

「ああん、やすとさあん……」

しかし絶頂の余韻で力が入らないのか、しばらくするとガクンと頭を垂れて覆いかぶさるように倒れ込んだ。



ライラは膣奥を突きまくられる肉悦に翻弄され、もうシャツの裾を掴んでいることでもきなくなっていた。それでも限界が近いことを訴えると、熱を帯びた視線でジッとこちらを見つめてちゃんと頷いてくれる。

断続的に繰り返していった膣内の収縮はどんどん大きくなり、激しく、それでいて小刻みに震えながら肉棒を締めつけてきた。

「もう、我慢できないっ……出ますっ!!」

力任せに腰を振り、亀頭が何度も子宮口にぶつかる。急速に膨張した射精欲はもう自制できるような状態ではなかった。

激しい絶頂感と共に熱い欲望の塊が股間の奥から湧き上がってくるのを感じ、ライラの一番深い部分を思いつきり突き上げた。

ドビュウウウ! ビュ、ビュッ! ビュルル、ブビュウウウ——ッ!!

「ひいっいいいいっ! あっ、あああんっ……で、出てるううう! 私の中にいつ、秦人さあんの……精液がああっ……いっばい出てますううっ!!」

凄まじい勢いで吐き出された白濁液が子宮口を打ち、あっという間に狭い膣内を満たしてしまふ。

秦人が射精するのと同時に、ライラもまるで電気を流されたかのように身体をビクンビクンと痙攣させていた。当然膣内も今まで一番激しく膣圧が変化し、股間から噴き出

した潮が二人の股間を濡らしていく。

「くああっ……気持ちよすぎて、止まらないっ！」

激しい絶頂感の中、感度が何倍にも膨れ上がっている性器に生々しく絡みつく膣粘膜の感触が股間を蕩けさせる。ライラとのセックスで味わう中出し絶頂は回数を重ねる度に、どんどん二人の身体がなじんでその快感が増していくようだった。

あまりの気持ちよさに自分の意思など関係なく大量の精液を吐き出し続け、精液を搾り取られる悦びと快感に全身が打ち震える。

「はあああっ……だめえっ、気持ちよすぎておっぱいがあ……んひいっ！」

ぴゅ、ぴゅっ……ぴゅる……ぷしやああ——っ！

しかも触れていないのに彼女の乳房からはまるで噴水のようにミルクが飛び散り、中出し絶頂の凄まじさを物語っていた。

それでも若い男根は彼女の膣内でまだ脈動を繰り返している。その度に濃くて粘り気の強い牡汁を大量に流し込んでいく。

「……あはあ、んっ……も、もう頭が真っ白になって、何も考えられません……」

人間の女の子とは違い、肉悦だけでなく濃厚な精を子宮から直接吸ったせいで感じすぎてしまい、意識が朦朧としているようだ。

焦点を失った視線が宙をさまよい、ミルクで濡れた豊満な肢体がぐったりとベッドに横

たわっている。

「はあはあっ……ライラさん、大丈夫です……うわっ!？」

凄まじい絶頂感に全身を襲われ、肩で息をしながら何とか少女に声をかけようとした時だった。

突然、目の前が眩い光に包まれ何も見えなくなる。しばらく待つてから恐る恐るまぶたを開けてみると――。

「えっ！ ライラさん、その格好はっ……」

つい今の今まで部屋着姿だったはずのライラはいつの間にか見覚えのある黒い衣装を身にまとっていた。

しかも背中には羽根が、お尻には尻尾が生えていてフリフリと揺れている。

「す、すみません……感じすぎてしまって、魔法が解けちゃいました……」

今までにない激しい絶頂に達し意識が飛びかけたせいなのか、ライラは変身が解けてサキュバスの姿に戻ってしまった。常に人間の姿だったので少し忘れかけていたが、彼女は淫魔だということを改めて思い出す。

刺激的なサキュバス姿に変わっても身体の状態はそのままらしく、ペニスはしっかりと膣と結合していて熱くてぬかるんだ心地いい肉壁の感触が伝わってくる。

「この姿では嫌ですよね……もう少し待つてください……落ち着いたら、ちゃんと変身し

ますから……」

何だか不思議な感覚に陥っていると、ライラが申し訳なさそうに謝ってきた。人間の姿ではなくなったので泰人が嫌がっていると思っただろうだ。

しかし少年はすぐに首を横に振る。

「全然嫌じゃないですよ……別にサキュバスの姿だろうと、人間の姿だろうと関係ないです……ライラさんはライラさんですから……」

まったく気にならないと言えばウソになるが、一緒に過ごしてきて彼女のが誰よりも可愛い女の子だということを知っている泰人にとっては些細なことだった。

彼女の全てを受け入れると決めたのだから、むしろこの本当の姿をしたライラを愛してあげたい。

「や、泰人さん……」

そんな真剣な想いが伝わったのかライラは瞳を大きく見開き、見る見るうちに目尻に涙が溢れてくる。

「……あ、ありがとうございます……あら、おかしいです……すごく嬉しいはずなのに、どうしたんでしょう……」

「ライラさんは泣いてる顔も可愛いですね……」

「ダ、ダメです……見ないでください……」

泣き笑いの表情を浮かべたサキュバス少女は恥ずかしそうに上半身を捻り、両手で口元を隠してしまふ。

少年も無理に覗き込むようなことはせず、抱えていた両足のうち片方だけを持ち上げて彼女を横に向かせ、硬度を保っているペニスを挿入したまま自分もベッドに寝転ぶ。

そして首の下から腕枕をするようにして腕を差し込み、愛しい恋人の身体を背後から抱きしめた。

「ああ……泰人さんの腕……とても温かいです……もつとギュッとしてください……」

いわゆる背面側位の体勢で顔は見えないが、正常位よりも密着感が増して、お互いの体温を感じる事ができる。

ライラも少年の腕に自分の手をそつと重ねて嬉しそうに抱き寄せた。彼女もこの体位が気に入ったようだ。

「サキュバスのライラさんも、たくさん気持ちよくしてあげますから……精液だったつぷりご馳走してあげますからね……」

空いている方の腕で上になっている太ももを抱えてグイッと腰を動かす。

変身が解けても彼女の膣内は相変わらず愛液と、先ほど中出しした精液でびしょ濡れ状態だった。そして熱くなった肉壁がキツくペニスにしゃぶりついてくる。

（ああ……ずつとこうしてたい……）

愛しい恋人と身も心も一つになり、抱き合っている肉悦だけでなく精神的にも満たされ、胸にトクトクと温かい感情が湧き上がってきた。

きつとこれが幸せってことなんだろうと実感する。

「はあん！ す、すごいです……今出したばかりなのに……まだこんなに大きくて、硬くて……それに精がたくさん流れ込んできます……」

軽く性器が擦れ合っただけで甘い声を漏らす美少女。

その喘ぎ声も何も変わらない。

髪の毛から漂う甘い香りも、腕に感じる息遣いも、全てサキュバスの姿になっても泰人が大好きなライラのままだった。

「だってライラさんがこんなに魅力的だからですよ……こんな可愛い人が僕のお嫁さんだなんて、興奮しちゃいます、よっ……」

横になってるので腰の動きは制限されてしまうが、肉ヒダの一つ一つを味わうかのようにつくりと勃起ペニスを出し入れしていく。

「ああん！ う、嬉しいです……私も泰人さんのお嫁さんになれて幸せですうっ……」

そんな優しい腰使いでも絶頂に達したばかりで敏感になっている膣内には堪らないらしく、ライラは早くも声を抑えきれなくなっている。

甘い嬌声を漏らして喘いでいる姿に少年の興奮は煽られ、もっともっと彼女を感じたく

なってしまう。

(気持ちいいっ……もうライラさんのことしか考えられないっ……)

無意識のうちに腰使いが少しずつ強くなり、ベッドのスプリングがギシギシと軋む。

性器の粘膜同士が擦れ合う度に甘い痺れが股間に流れ込み、彼女と快感を共有しているという悦びと興奮で胸が昂っていく。

「あ、ああっ！ いいですっ……さっきよりも強く中が擦れて……気持ちいいっ……」

今はバックから挿入しているのと同じで、膣の形とは反対向きに反り返るペニスが膣内の天井に強く当たりゴリゴリと擦れた。その激しい淫摩擦が敏感な逸物を刺激し、先ほど射精したばかりだというのにもう限界が近づいてくる。

ライラもかなり感じているらしく、ピストンのスピードの変化に反応して大きな喘ぎ声を上げた。その甲高くも艶を帯びた悲鳴が室内に響く。

「……本当ですか？ でも、もっと感じさせてあげますからっ……」

淫らに喘ぐ彼女の姿に気をよくした少年は首の下に回していた腕を引き抜くと、今度は脇の下から差し込むようにして、重ね餅のようになって押しつぶされていた乳房を鷲掴みにする。

「ひゃう！ お、おっぱい……泰人さんに触られただけで熱くてジンジンしてきちゃいます……」

サキュバスの姿に戻ったせいで乳房が隠れてしまっていたので、衣装の胸元をずらして再び露出させた。

彼女のおっぱいは先ほど思いつきり射乳しまくった状態のままらしく、少年が軽く揉むと、さらに乳首からじわじわとミルクが溢れてくる。

「くうっ……そんなに気持ちいいですか？」

「は、はい……おっぱいをギュッてされながら、奥を擦られるのが……すごく気持ちよくて好きです……で、でも……キスも、もつと好きです……」

さっきまでは恥ずかしがってこちらを向いてくれなかったライラが、顎をツンと反らして唇を差し出してきた。

もちろん泰人だつてキスをしながらエッチするのは大好きだ。すぐに熱を帯びた吐息を漏らしている彼女の唇に自分の唇を重ねる。

「はぁん、泰人さぁん……ちゅ、ちゅる……ンふう……」

するとサキュバス少女はすぐに舌を突き出して積極的に口内を舐めてきた。唾液をたっぷりと含んだ軟体物が舌尖に触れた瞬間、痺れるような快感が口から広がり背筋がゾクゾクと震える。

しかも性器だけでなく舌も絡ませ合っていることで、より彼女と繋がっているという一体感が増していく。その興奮のせい、血液の流れが一気に加速したように全身が火照っ

てきた。

「ンちゅ……ちゅぶ、僕も気持ちいいですよ……ずっとこうしてたいです……」

ペロチューで互いの唾液をすすり、おっぱいを揉みながら腰を振る。同時にあれこれするのは大変だが、とにかくライラの全てを味わいたかった。

側位とはいえっても美少女の股間は大股開き状態なので、肉棒は深々と膣奥をえぐり激しい結合を繰り返す。

ズリゅつ、ズツチュ！ ズチュ！ ズツチャツ！

「あ、あんっ！ ああんっ！ わ、私もっ……こうやって、泰人さんを……ずっと奥に感じてたいですうっ……はああんっ!!」

股間をぶつける度に乾いた音が鳴り、肉感的なヒップが波打った。しかしそれ以上に、大量に溢れてくる愛液で濡れた膣肉をかき回す派手な水音が室内に響く。

粘膜同士が擦れ合う度に蕩けるような甘い快感がペニスから股間へと広がり、先ほど射精したばかりだというのに、またしても熱い欲望がこみ上げてきた。

「ンぢゅ……ちゅぶぶ……す、すごいですっ……吸っても吸っても、どんどん精が流れ込んできて……このままでは……私、おかしくなっちゃいそうですうっ……」

肩越しに覗くサキュバス衣装からこぼれた巨乳が、腰突きの反動でぶるんぶるんとお皿に載ったプリンのように弾む。その魅惑的な光景が、手のひらに広がる極上の揉み心地が

さらなる興奮を誘う。

しかもうつとりと頬を染めたライラはあへあへと甘ったるい吐息を漏らし、必死に舌を絡ませてくるのだ。口からも股間からも蕩けそうなほどの快感が広がり、再び湧き上がっている射精欲がどんどん大きくなっていく。

「くっ……ああ、また出そうですっ！」

サキュバスの姿に戻ってもライラの膣内は蠢くように激しく収縮を繰り返し、あれほど精を吸ったのにまだ全然足りないとはばかりに限界寸前の逸物にしやぶりついてきた。

自分を、自分の精を強く欲している。そんなライラの気持ち在必死に絡みついてくる膣粘膜から伝わってきて、興奮は昂り膨れ上がった射精欲は今にも爆発しそうだった。

(ああ！ ライラさんっ……ライラさんっ！ 絶対に離しませんからっ!!)

いつしかむっちりとした太ももを抱えている腕にも力が入り、腰使いは激しくなる一方である。それに結合部はヤケドしてしまいそうなほど熱くなっていた。

「……ひいああん！ は、イひいいいっ……い、いいですよっ……私も、もう……イキそうで……ダメえ、はああああ……んっ！」

ライラはさらに強く少年の腕を抱きしめ、快感に身悶えしている。

頬や首筋だけでなく露出度の高いサキュバスの衣装から覗く肩や胸元もほんのりと上気し、色っぽい雰囲気は漂う。そんな色香に当てられたかのように泰人は狂ったように腰を

振りまくった。

ズリユツ！ ズチユツ、ズチユウウツ！ ズツチャズツチャズチユウウツ！！

「あああああんっ！ や、泰人さあんっ……気持ちいいですっ……泰人さんでいっぱいになつてきもちいいいいい……ッ！！」

悲鳴に近いような甲高い声で快感を訴えるライラ。サキュバスの状態でも思いつきり感じてくれているのが嬉しくて、熱い想いが胸を満たしていく。

そんな喜びが昂る気持ちをさらに煽り、興奮を一気に爆発させた。

「ライラさん！ ライラさんっ！ 大好きですっ、ずっと一緒にいましょうねっ！」

愛しい恋人の名前を呼びながら泰人は力任せに腰を打ち込む。絶頂が近いのを感じ取り下がつてきた子宮口を押し上げるように龟头が何度もぶつかった。

「はあ、ひいひいひいっ！ 約束ですっ、絶対に泰人さんと一緒ですううううっ！！」

ライラもいつしか自ら腰を揺らめかせて、激しく出入りする少年の肉棒をしつかりと受け止めてくれる。

永遠にこうやって彼女を感じていたい。しかし股間の奥で渦巻いていた欲望の塊は膨張を続け、ついに限界に達した。

「あああああつ！ イクっ、出るううううっ！！」

二度目だというのに自分でも驚くほど熱く大量の精液が尿道を駆け上がる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全巻の方向性でございませぬ。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!